

「人を思いやる慈悲の言葉、愛語」

岡山県 養命寺住職 福田光人
ようめいじ ふくだこうじん

私が、僧侶としてまだ駆け出しの頃のことです。お檀家さんに対しどのように接して良いかかわからず、戸惑っていた時期がありました。僧侶としてお檀家さんや地域の方に対し、どのような存在であるべきか、理想の僧侶とはどうあるべきか。自らに問う日々が続きました。惑いの日々の中で、時にはどこかで仕入れてきた教えを、さも自らの知識のように語ったりしました。今思えば滑稽に思えてしまいます。

そんな時、先輩の僧侶からアドバイスをいただきました。「無理な自分を演じる必要は無い。君が長年働いて福祉の仕事で学んできた事を、飾らずそのまま生かせば良いんだ」と。私はその言葉を聞いて、ハッと我に返りました。福祉の現場で見返りなど求めず、一心不乱に働いてきたことを思い出したからです。

当時それができたのは、利用者さんの笑顔や「いつもありがとう」の言葉があったからでした。そのおかげで疲れや嫌な事が吹き飛び、元気が湧いてきたことを思い出しました。私を氣遣う先輩からの助言で、大切なことを見失っていた自分に気づきました。

自分の原点を思い起こした私は、今、飾らない形でお檀家さんと接する日々を送っています。日々様々な苦勞もありますが、最近こんな私に対し「あんたが好きじゃ、ありがとう」という温かい言葉をいただけるようになりました。

仏教でいう「愛語」とは、人を思いやる慈悲の言葉です。それは、人が生きる上で欠くことのできない尊い言葉です。大切なことを見失っていた私に助言を下さった先輩の言葉、福祉の現場で頂いた「ありがとう」の言葉、お檀家さんから頂いた「あんたが好きじゃ」という言葉、そのすべてが私を支える「愛語」そのものであったのだと思いました。「愛語」により救われた私。私も人を真に思いやる言葉、人を救える言葉かけを心がけたいと思います。